

パリのスクオッターにおける エスニックな紐帯の切断と再生

稲葉 奈々子

キーワード：移民、エスニシティ、フランス、スクオッター、住宅への権利

1 はじめに：「住宅への権利運動」におけるサブサハラ系移民

市民団体による「住宅への権利運動（以下DAL）」は1990年にパリ市ではじまった⁽¹⁾。バブル経済期に地上げ目的の放火により焼け出されたサブサハラ系移民の家族のHLM（適正家賃の公営住宅）への入居が運動の目的である。自治体や銀行、保険会社など公共性の強い機関は投機目的で不動産を所有している。これらの不動産のなかには、バブル経済崩壊後に価格が暴落、空きビルのまま放置されているものも少なくない。そうしたビルを占拠し、立ち退き裁判の場で、「住宅への権利」つまりHLMへの入居を求めるのが、「住宅への権利運動」である。

活動開始以降、住宅への権利運動は重要な判決を勝ち取ってきた。ひとつめは、「必要に迫られての占拠は刑法に違反しない」など、「不法」占拠を合法化する判決である。ふたつめの判決は、大家の「所有権」と借家人の「住宅への権利」が憲法上同等の価値を持つとし、立ち退き執行に制限を課した。HLM入居の実績でも、これまでに登録した12000家族のうち、把握されているだけでも約4000家族が住宅を得ている。

このDALパリの活動の中心を占めるのが、サブサハラ⁽²⁾出身のアフリカ系の移民たちである。とくにマリ人が多数を占めている。現在までに登録している12000家族のうち90%以上が、サブサハラ出身者となっている。以下でみていくように、サブサハラ系移民は、フランスの移民のマジョリティではない。そのなかでもマリ人は多数を占めていない。それにもかかわらず、DALにおいてはマリ人が多数を占めている。

以下では、サブサハラ系移民の現状を概観し、これらの移民が「住宅への権利運動」に参加するまでの過程を明らかにする。スクオッター（不法占拠住宅）における「共同生活」およびその後の「住宅への権利運動」への参加にあたって、移民たちはどのような制度によって結びつけられているのだろうか。共同体の機能による結びつきなのだろうか、それとも移民先の新しい環境で、脱産業社会が生み出したといえる新たな行為者が形成されているのだろうか。

2 フランスのサブサハラ系移民

1999年の国勢調査では、サブサハラのアフリカ系移民は約393289人となっており、前回1990年の国勢調査時よりも43%増加している。アジア系移民が14.5%増、マグレブ系移民については6%

(1) 「住宅への権利運動」について詳しくは、稲葉奈々子・樋口直人「脱産業社会の社会運動?：フランスにおける住宅への権利運動を中心に」『ソシオロギス』第21号、1997年、pp28-43で議論している。

(2) フランスへのアフリカからの移民の呼称に関して、アルジェリア、モロッコ、チュニジアからの移民については「マグレブ系移民」が定着しているが、セネガル、マリなどサハラ砂漠より南の国からの移民については、「西アフリカ(Afrique de l'Ouest, Ouest-africain)」、「サブサハラ(Afrique subsaharienne. Subsharien)」、「ブラックアフリカ(Afrique Noire, Africain noir)」など研究者によってさまざまである。当事者たちは「アフリカンAfricain」と自称することが多い。西アフリカでは一般的に、セネガル、マリ、コートジボワール、ギニア、モーリタニアなどフランスの旧植民地がフランスへの移民を送り出している。サブサハラではそれに加えて、カメルーン、コンゴ(共和国)、コンゴ民主共和国(旧ザイール)、マダガスカル、モーリシャス、コモロなどがおもな移民の出身国となっている。本稿では、旧植民地出身者がおもな対象であるが、コンゴ、マダガスカルなども含むため、基本的に「サブサハラ」を用いている。

増、EU加盟国からの移民は9%減となっている。

バル⁽³⁾によれば、フランスにおけるサブサハラ出身のアフリカ系移民の増加傾向は、60年代から持続的に続いており、80年代以降はその傾向が大きくなっている。1962年には17787人、68年には33020人、75年には81850人となっている。それが1982年には171884人、1990年には275182人、そして1999年の国勢調査では393289人となっている。増加の理由としては、家族合流にともない女性と子どもの移民が増えたことが考えられる。女性数は82年には62172人と全体の36.17%であったのに対し、90年には117382人(42.66%)、99年には187444人(47.6%)となっている。また19歳以下の若年層が1990年代には全体の26%を占めており、うち74%以上が16歳以上に集中している。

フランスへの移民が急増する1980年代は、サブサハラのフランスの旧植民地の国々にとって、バルの言葉によれば「失われた10年」であった。人口増加に対して、経済がマイナス成長を毎年記録した時期であった。90年代には成長した地域もあったが、全体としては、IMFの構造調整計画により、公共セクターで雇用が創出されなくなっていた。そのため、出身国で勉学を続けるよりもフランスに移民する若年層が増えたとされる⁽⁴⁾。さらにモーリタニアやコンゴでは短期間ではあったが内戦が勃発した。コートジボワールやマダガスカルでは内戦状態には至らなかったが、緊張状態が続いている。こうした治安の悪化も移民のきっかけとなったとされる。

国籍別にみると、1990年に20000人以上がフランスに滞在しているのは、セネガル、マリ、モーリシャス、旧ザイールのみだった。99年には、セネガル(53859)、マリ(35978)、コンゴ(35318)、コートジボワール(29879)、マダガスカル(28272)、モーリシャス(27806)、カメルーン(26890)、旧ザイール(23727)と8カ国に増えている。フランスに

おける今日のサブサハラ系移民は、バル⁽⁵⁾によれば、80年代以前とは様変わりしているという。80年代までは識字のない農民が非熟練セクターに雇用されていたが、今日ではかつてより高学歴化もすすみ、「富裕層」も現れている。とはいえ、女性が増え、若年化が進み、高学歴化が進んでいるのは、80年代以降に増えた移民であり、60年代、70年代から移民を送り出してきたセネガル、マリについては、依然として若年層は少なく、男性の割合が女性よりも多く、セネガルについていえば女性の割合は41%、マリについては32%となっている。

次に、居住地について見ると、DALに訪れる移民は、80年代以降の移民であることが分かる。サブサハラ系移民のおもな居住地はパリ市と近郊6県からなるイル・ド・フランス地域圏に集中している。イル・ド・フランスに居住しているのはフランスの移民全体では39.6%だが、サブサハラ系移民については、65.4%である。マリ人にかんしていえば87.26%と、イル・ド・フランスが圧倒的多数の居住地となっている。移民全体では、都市部よりも都市郊外居住者の割合が高くなっているが(前者が43%、後者が57%)、アフリカ系移民については58%が都市部に居住している。

3 脱産業社会の移民たち

フランスの移民研究におけるエスニック・コミュニティの評価

高度成長期のフランスの移民たちは、都市郊外の低家賃の公営住宅に居住した。自動車産業など高度成長期型の産業の衰退にともない、これらの移民たちは職を失い、第2世代の失業問題も深刻である。これが、「フランスの移民問題」であった。そのため、フランスの移民研究においては、「エスニシティ」という問題よりも、「市民になる」という「社会統合」、ある意味では「脱エスニシティ」の議論のほうが多かった⁽⁶⁾。フラ

(3) Jacques Barou, "Les immigrations africaines en France au tournant du siècle" *Hommes & Migrations*, no. 1239, 2002, p6

(4) Ibid., p8

(5) Ibid., p13

(6) 日本で「フランスの移民問題」としてもっぱら紹介されてきたのも、おもにマグレブ系第2世代の社会統合の問題であった。そこで議論される出身文化とフランス文化のはざまにおかれる若者たちの葛藤もまた、「脱エスニシティ」の過程として議論されていた。たとえば「ブール」という出自にもとづいたアイデンティティを積極的に自称する運動についても、運動そのものが「共和国的理念に基づいているという意味では、フランスに統合されている」というように。この傾向は、トゥーレーヌ学派の移民研究がおもに紹介されたために増幅された感がある。

ンスの80年代半ばから90年代はじめの移民研究は、「移民から市民へ」という図式に規定されていたといえる⁽⁷⁾。

このように90年代初頭までのフランスの移民研究は、もっぱら「社会統合」に焦点があてられてきた。一方で、「社会統合」の問題として認識されてこなかったのが、サブサハラ系の移民である⁽⁸⁾。サブサハラ系の移民は60年代からはじまっていたが、都市部に居住、都市底辺層に従事し、80年代以降に増加している。したがって、高度成長期の製造業を支えたマグレブ系とは別の「移民問題」を形成している。

フランスにおけるアルジェリア人は、1962年には350484人、68年には530000人、72年には800000人、75年には710000人と⁽⁹⁾、同時期で比較すると70年代までは、サブサハラ系の移民のほぼ10倍の人数となっている。60年代、70年代に移民してきたサブサハラ系の単身男性も製造業に従事していた。しかし大企業が雇用の中心だったアルジェリア人と比較して、中小企業における雇用が多い⁽¹⁰⁾。80年代以降は、雇用先はおもにサービス業、とくに清掃業とレストラン業に集中している⁽¹¹⁾。

ティメラによれば、80年代以降に渡仏したサブサハラ系移民がサービス業に集中したのは、製造業における雇用の削減だけでは説明できない。先に移民していたマグレブ系の移民が同胞向けの就職ネットワークを確立しており、サブサハラ系移民がそこに参入できなかったためとされる⁽¹²⁾。清掃業は企業の直接雇用から、80年代

に派遣による間接雇用に移行したため、サブサハラ系移民にも参入可能であったという⁽¹³⁾。その後はサブサハラ系の移民も同国人あるいは同じ村出身者の就職ネットワークを発達させ、ひとつの会社に同じ村出身者が集中していることもあるという⁽¹⁴⁾。

アソシエーション活動についても、サブサハラ系移民の活動は古いものでは1964年から存在するが、現在のアソシエーションの半分以上が1987年以降に創設されているという⁽¹⁵⁾。

このようにして90年代以降になると、サブサハラ出身者の移民研究があらわれるようになるが、サブサハラ系移民の研究者よりも、フランス人研究者がまず注目したのは、女性のアソシエーション活動であった。サブサハラ系の女性移民たちが、医療機関や、市役所、社会保険事務所など公的制度へのアクセスから排除されている同じ移民女性たちの通訳や付き添いのネットワークを全国各地で発達させており、これらを総称して「連携する女性」と呼んでいる。

通訳や付き添いといった活動により、エスニック・グループを基盤とした組織が発達した。これをもって、「エスニシティなど中間団体の存在を容認しないフランスの公的制度が『万人に対して平等』であるために、補完的に非公式に機能しているのがエスニック・コミュニティである」と評価されてきた⁽¹⁶⁾。つまり、エスニック・コミュニティが介在してはじめて、移民たちは公的機関にアクセスし、「権利」を行使できる、個人と国家の直接の関係など機能していないのだ、と⁽¹⁷⁾。

(7) Costa-Lascoux, Jacqueline, *De l'immigré au citoyen*, Paris: La documentation française, 1989.

(8) この「もうひとつの移民問題」については、稲葉奈々子「90年代フランスにおける『もうひとつの移民問題』：脱工業社会とアフリカ系移民」宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論』人文書院、1998年、pp283-305で論じている。

(9) Alain Gillette & Abdelmalek Sayad, *L'immigration algérienne en France*, 1984, Entente

(10) Mahamat Timera, *Les Soninké en France: D'une histoire à l'autre*, Karthala, p198

(11) Ibid., p198

(12) (13) Ibid., p200

(14) Ibid., p202

(15) Christophe Daum, *Les associations de Maliens en France: Migration, développement et citoyenneté*, 1998, Karthala, p18

(16) Catherine Delacroix, "Cumul des discrédits et action: l'exemple des médiatrices socioculturelles" in *Hommes & Migrations*, no.1249, 2004, pp10-23.

(17) このような「エスニック・コミュニティ」や移民によるアソシエーション活動への注目は、そもそも90年代の分権化の流れのなかで登場してきたことを見逃してはならないだろう。日本と同様、公的サービスの外部委託や、アソシエーションによるソーシャルワークの「下請け化」の傾向がエスニックなアソシエーション活動への評価の背景にある。

「連携する女性」は、エスニック・コミュニティを基盤として形成されている。移民先の「新しい社会」で、住宅、家族の収入、滞在許可証、子どもの学校教育など、再生産労働にかかわる公的制度的利用を支援するアソシエーション活動である。この活動は、アソシエーション活動が仲介することで女性の社会統合を促進する制度として評価されている⁽¹⁸⁾。女性たちは出身の農村では、市場への出荷、手工芸品製造、小規模貿易など、協同の経済活動を行っているという。都市では講により互いに融資して、レストランや店をはじめなどの経済活動を支えているのが女性たちのアソシエーションであるという。「連携する女性」も、そうした活動のひとつと考えられている。

同様にティメラ⁽¹⁹⁾は、「エスニック・コミュニティ(伝統的なコミュニティ)」の解体の結果として、市民社会への移民の「統合」が達成されるという図式の不適切さを指摘している。彼によれば、エスニック・コミュニティの存在は、むしろ統合を媒介する制度として機能している。

住宅への権利運動もまた、「連携する女性」同様、アソシエーション活動が仲介することで、公営住宅への入居という社会統合を達する集合行為といえる。ここでの集合行為とは、住宅のない家族たちによる空きビル占拠と、公営住宅への入居要求の形をとる。

この集合行為、つまり占拠への参加では、もちろん「住宅を得る」という共通の目的があるからこそ、連帯が形成されているといえるだろう。しかし、実際には、この共通の目的だけで占拠が成立することはない。それでは、DALの移民たちの連帯はいかにして形成されているのだろうか。

エスニック・コミュニティの存在に注目する研究者たちは、DALの運動、つまり市民社会を代表するような社会運動への移民の参加につい

ても、同様にエスニック・コミュニティが媒介してこそ機能すると考えている。たとえばマリ人「コミュニティ」は、DALの占拠のなかでリーダー的な役割を果たしている。しかしながら、DALで同じ占拠に参加しているマリ人たち、あるいは他の国籍であっても、国籍が同じというだけで、エスニック・コミュニティが集合行為の形成の基盤にあるといえるのだろうか。

たとえば、ギニアビサウ出身者の貯蓄活動について調査したディオップによると⁽²⁰⁾、同国人の病気、失業、法律上の問題解決などに対応する貯蓄活動は、同国人から構成されるものと、より「属人的なもの」とに分類される。後者は「移民の初期には『理論的には』同じ家族のメンバーのみが参加するものだが、実際には物質的状況が悪いため、家族は再編され、漸次ズレが生じていき、貯蓄活動が実践される範囲は、最初は村のメンバー、さらには同じ地域まで拡大されている」とディオップは述べている。また、ドム⁽²¹⁾によると、マリ人を中心とするセネガル側流域出身者のアソシエーションは、1番目に「〇〇村の移民」による少人数のアソシエーション(単身寮のなかで創設される)、2番目に若年層中心のアソシエーション、3番目に同じ村出身者に限らないアソシエーションなど調査時点で400以上存在しているという。ドムが調査したアソシエーションは、すべて出身村の開発を目的として組織されている。80年代以降にフランスが西アフリカに対するODAを増額し、経済協力を目的としたNGO活動が活性化すると、同村の移民アソシエーションも性格を変えていき、村や地域横断的なアソシエーションが誕生するようになったという。しかしフランスにおける移民の生活上の相互扶助を目的としたアソシエーションについては言及されていない。キミナルらの研究では、男性の相互扶助的活動はもっぱらモ

(18) Catherine Quiminal, 2000, "The Associative Movement of African Women and New Forms of Citizenship" in Jane Freedman & Carrie Tarr (eds.), *Women, Immigration and Identities in France*, Oxford: Berg. Delacroix, Catherine, Chahala Beski, Zaida Radja Mathieu, Sandrine Bertaux, 1996, *Médiatrices dans les quartiers fragilisés: Le lien*, La Documentation Française.

(19) Mahamat Timera, *Les Soninké en France*, op.cit., pp89-106.

(20) Amadou Moustapha Diop, *Société manjak et migration*, 1996, Puce et Plume, p110

(21) Christophe Daum, *Les associations de Maliens en France*, op.cit., p19

スクを中心に行われているといい、同国人、同村出身者によるものではない⁽²²⁾。

「連携する女性」についてはそもそも、出身村のつながりと出身村の開発を中心とした男性のアソシエーションに対して、「フランスでの適応とフランスにおける解放のため」に活動しており、さまざまな出身の女性がひとつのアソシエーションのなかに混在しているという⁽²³⁾。

さて、DALの運動も集合行為であるが、ここでは、サブサハラ系移民の連帯はどのようにして形成されるのだろうか。

4 DALの占拠の担い手としての サブサハラ系移民：DALに来るまで⁽²⁴⁾

DALを構成するのは、①DALの執行部ともいえる運動の方針を決定するメンバー、②相談に来る人を受け付けるボランティアたち、③支援者たち、④相談に来る人たち、⑤住宅を得るまでの運動の過程で、DALの運動に加わる人たち、⑥住宅を得たあともDALの活動に加わる人たちである。この大まかに6種類の人たちが円環を描くようにかかわることで、運動が機能している。

本稿では、このうち④から⑥までを扱う。このうち④と⑤が住宅難を抱えながら運動に加わる人たちであり、相談にくる「クライアント」であるが、DALでは、これらのカテゴリーを「les familles」＝「家族」と呼ぶ（以下では、特に言及しない限りは、「家族」とは、基本的にDALの活動に参加する移民たちを指している）。

DALの占拠がサブサハラ系移民家族たちとともに実施され、占拠した建物は家族たちの自主管理により運営されるため、家族たちの連帯があってこそ、数々の占拠は成功したと考えられ

てきた。その家族たちを結びつけているのが、エスニック・コミュニティと考えられてきたのである。DALを訪れる家族たちのエスニックな結びつきは、実際にはどうなっているのだろうか。

DALに相談に来る経緯と居住環境

家族たちがDALに相談にくる経緯には、大きく次のようなパターンがある。

- (1) ソーシャルワーカーの紹介、あるいは個人で電話帳その他の情報をもとに訪れるなど、個人的に相談にくる
- (2) 友人の紹介
- (3) 老朽化して居住環境が劣悪化した建物の住人たちが一緒に相談にくる
- (4) 偽不動産屋の紹介で同じ建物に住むことになった人たちが一緒に相談にくる
- (5) スクオッターの住人たちが立ち退き裁判や居住環境の劣悪化にさいして、一緒に相談にくる

2003年現在、これまでに登録した約12000家族のうち約4000家族がHLMに再入居している。現在、登録しているだけではなく、実際にコンタクトをとって再入居先確保のために進行中のケースは約4000家族である。そのうちの1461家族は「建物ごと」の登録(dossier collectif)となっている。これは36.5%にあたる。上記の分類では(3)から(5)までが、この「建物ごと」の登録にあたる。

残りの63.5%は、個人でDALに登録している。これが上記分類の(1)から(2)に該当する。

また、4000家族のうち家族形態がわかっているのは全体の2324家族だが、うち1590家族が夫

(22) Catherine Quiminal & Mahamet Timera, 2002, "1974-2002, les mutations de l'immigration ouest-africaine" *Hommes & Migrations*, no.1239, pp19-32

(23) Sonia Fayman "Les associations de médiation sociale et culturelle, du bénévolat à la professionnalisation" in *Hommes & Migrations*, no. 1249, 2004, p25

(24) DALの活動については1997年から現在まで、占拠への参加と相談受付を参与観察として行いながら断続的に調査を継続している。本稿では、DALが受け付けた相談の家族ごとの調書のうち、集合住宅に居住する家族の調書である「集合ファイル」および、DALがデータベース化した4800人分のデータを使用している。また、スクオッターの移民に対する聞き取り調査は2001年～2003年に、参与観察と15人に対するインタビューを行った。スクオッター以外の移民に対するインタビューは97年から継続しており、本稿ではそのうちの3人についてのデータを使用した。なお、文中の氏名はすべて仮名にしてある。

婦からなる家族、734人が単身者あるいは単身親家族、うち362人が独身、166人が別居、144人が離婚、66人が寡婦(夫)となっている。2324家族のうち、子どもがいないのは222家族。子ども1～3人が1394家族、4～6人が603、7～10が99、11人以上が6家族となっている。単身者あるいは単身親家族のうち141人が男性、569人が女性となっている。

次に、12074家族のうち、DALと日常的に連絡をとりあう関係にある5273家族の状況をみていきたい。まず、国籍である。家族のなかには子どもや配偶者がフランス国籍の場合があるが、ここでは家族のなかでDALに登録した人の国籍でカウントされている⁽²⁵⁾。

DAL登録家族の国籍

フランス	803
マリ	508
アルジェリア	505
セネガル	340
モーリシャス	324
コートジボワール	221
ザイール	198
チュニジア	179
ギニア	88
ハイチ	85
モリタニア	65
コンゴ	63
スリランカ	48
カメルーン	47
トルコ	35
ガンビア	33
アンゴラ	32
ユーゴスラビア	19
エジプト	18
ポルトガル	13
コモロ	11
トーゴ	10
ニジェール	10

(10人以上の国のみ)

住宅状況についてみると、937家族はスクオッターで生活している。全体の19.2%がスクオッター生活をしていることになる。これらの家族は立ち退きを迫られている家族として分類される。その他の理由で立ち退きを迫られている家族をふくめると、1905家族、39.1%になる。老朽化ゆえに居住不可能なため相談にくる家族は、全体のうち1427家族、29.3%を占めている。「ホームレス家族」のうち、ほとんどの場合がホテル住まいで、591家族、全体の12.1%を占めている。

5 DALに来るサブサハラ系移民の住宅環境とコミュニティ

個人化する移民

DALを訪れる移民の63%は、個人で住宅問題に直面している。フランスに定住している移民の多くは、まず居住している自治体のソーシャルワーカーに住宅問題を相談する。DALを紹介したのがソーシャルワーカーではない場合や、在留資格がない場合でも、フランスに定住している限り、育児手当、医療サービスなど、何らかの公共サービスにかんして、ソーシャルワーカーが仲介している⁽²⁶⁾。DALを訪れるのは最後の手段である。

カマラ氏

ギニアから96年に渡仏。双子の乳児と5歳の娘とともに13区に住んでいたが、夫は地方都市に仕事を探しにいくと出かけたまま、半年以上帰ってこない。在留資格がないため、家族給付を受けることができないし、子どもが小さいので仕事もできないし、フランス語もほとんど分からない。双子の子どもを出産するときに担当だった13区のソーシャルワーカーに今も相談している。電気代は請求書を持っていくと払ってくれる。食べ物や子どものオムツや衣類は、ソーシャルワーカーの仲介で、13区の人道団体がフードバンクを通じて届けてくれる。しかし家賃の滞納が続いており、立ち退きを迫られている。DALを紹介したのも同じソーシャルワーカー。

(25) フランス国籍を取得する割合が高いのは、モーリシャス、コートジボワール、ザイール、カメルーンなど80年代以降に移民が増えた国の出身者であることがわかっている。Jacques Barou, "Les immigrations africaines en France au tournant du siècle" art. cit., p8

(26) 筆者は約1年間、毎週3回、1回につき平均5人程度の相談事務をDALで行った。調査にはソーシャルワーカーの名前を記載することになっているが、ソーシャルワーカーとコンタクトをとったことのない人は10人に1人いるかいないかという程度であった。

カマラ氏は1997年に非正規滞在外国人の正規化措置を申請したが、申請費用の約2000フランを調達することができなかったため、パリに住んでいる同国人の友人と筆者が融通することになった。ここまで同国人のネットワークから切断されている例は多くないが、個人でDALに来る移民は、少なからずカマラ氏と同様の社会的特徴を備えている。

友人に紹介されてDALに相談に来る場合でも、一緒に来た友人が事務所を去るまでは、決して自分の住宅事情を相談相手に話さない人も多い。つまり同国人や同村のネットワークが存在していても、住宅を得る場では機能していない。

個人的に住宅難に直面している人の大部分は、渡仏直後には親類や知人宅に居候している。そこでしばらく過ごして住宅事情を把握してからスクオッターやアパートに移動している。渡仏してすぐにスクオッターに居住する人は、以下でみるようにニセ不動産業者に騙された場合を除いては、ほとんどいないと考えてよい。スクオッターにはエスニック・コミュニティが存在しているように考えられがちだが、実際には個人で住宅難に遭遇して入居しており、入居後も同じ建物の住人とはほとんど没交渉となっている。

移民自身によるスクオッター

自分で建物に入居する

スクオッター可能な建物の所在については、ほとんどの人が、職場で情報を得ている。そのため、大まかな出身国はスクオッターごとに偏りがある。たとえば13区のアリーグル通りのスクオッターには約100人が居住しているが、全員が中国系の移民である。居住者は、職場や知り合いからの口コミでスクオッターの存在を知り、三々五々入居しているが、DALを訪れる家族で顔見知りの者どうしはほとんどいない。スクオッターそのものは、「コミュニティ」としてはまったく機能していない場合がほとんどである。

この場合、老朽化ゆえに居住し続けるのが困難になった場合、あるいは大家が立ち退きを要求し、やはり居住し続けるのが困難になった場合に、住人たちはDALを訪れる。あるいは全員が立ち退きとなって、建物の前や公共空間でキャンプをする

ことで、その地域のDALのメンバーが立ち退きの事実を知って、DALのメンバーとなる。

ニセ不動産業者による斡旋

公営住宅の場合、多くは鉄製の扉が施錠されており、中に入るのは難しい。これらの建物の場合、「専門家」が開錠し、架空の大家をつくりだすか、あるいは自分自身が「ニセ大家」となり、さらにみずから「不動産斡旋業者」も演じて、住宅を探している(多くの場合同国人)移民に、住宅を斡旋する。敷金と何ヶ月分かの家賃と引き替えに鍵と契約書を渡し、そのまま行方をくらます。多くの場合、フランスにきたばかりで、しかも内戦などの理由で、国を離れることを余儀なくされた人々が狙われる。フランスに頼れる親類や知り合いがいなかった人がほとんどであり、子どもを連れて生活する場所もなく、差し迫った状況下で、同国人の不動産斡旋業者に話をもちかけられて、あっけなく騙されてしまう。この場合、本物の大家が現れて、立ち退きを要求される。

いずれの場合も、立ち退きがきっかけとなって、DALのメンバーとなる。このような場合、まとめて数10人単位が、宿無しになってしまう。そこで、DALの運動としてのスクオッターに参加することになる。

コミュニティ的つながりの切断

個人的に住宅問題に直面している場合でも、スクオッターに住んでいる場合でも、住宅に関しては出身村の知り合いを頼れないため、DALを訪れることになる。ほとんどの人が親類や知人の家に居候した経験を持つが、1年以上にわたると居づらくなり、スクオッターやホテル住まいなどに移行する。

フォファナ氏

コンゴから難民として98年に3人の子どもとフランスに来た。はじめはリヨンの單身寮にいたが、2002年にいとこを頼ってパリに来た。しかし子ども3人を連れていつまでもいられないところに、HLMから引っ越すから後に入居しないかと持ちかけられ、入居した。しかし入居後すぐにHLMの人がやってきて、自分が持っている契約書はニセだとわかった。

一般にスクオッターはエスニック・コミュニティによって機能していると考えられがちだが、筆者のききとりでは、そうした例はなかった。何よりも、実際には個人でスクオッターすることは難しい。空き家はほとんどの場合、窓や扉などの開口部をブロックで封鎖されており、HLMの空いた棟にはスクオッター防止のための鉄の錠扉がつけられている。そのためスクオッター斡旋業者が介入する例が多くなるのである。空き家とはいえ、いずれも都市部であり、人目もあるために簡単にはスクオッターできない。

ドrame氏

シャベル通りのスクオッターには4年前から住んでいて、今は29家族、約100人が住んでいる。国籍はセネガル、マリ、ギニア。スクオッターの存在は職場で知った。29家族のうち、入居する前からの知り合いはいない。入居してからも、特に近所づきあいはしていない。立ち退きがきまってDALに登録してから、話をするようになった。

クリバリ氏

フランスでは自分のことは自分でやらないと誰もやってくれない。マリでは助けあうし、住む場所の心配もいらない。食べ物も、タダで食べさせてあげるし、何の下心もなくタダで泊めてあげるのがあたりまえだ。それを未開発(sauvage)と思うかもしれないが、自分はこのアフリカの文明(civilisation)を誇りに思っている。スクオッターではそれぞれがフランス人と同じ生活をしていて。つまり、他の人と一緒に食べたりしない。今、この体育館では共同生活だから一緒に食べる。

入居可能なスクオッターの所在は、職場や知り合いから聞いて知る。サブサハラ系アフリカ人の場合、職種が都市清掃業に集中しているため、頻繁に職場で同国人から情報を得ている。同国人の間で流通する情報であるため、スクオッターごとに国籍が集中しているが、同じ国籍の家族だけが居住していたとしても、出身国にいたときから知り合いだったという例はない。ただし、例外として単身男性が多く居住する居住型の家具付きホテル(hotel meublé)がある。パリ18区のマックス・ドルモワ通りの家具付きホテルは、70年代から単身移民に住居を提供してきた。一部屋が約8平方メートルで部屋

のなかには、もともと衛生設備はついていないが、家族移民で滞在が長期化した人の場合、多くはシャワーやトイレ、キッチンを一角に備え付けている。洗濯機の上においたガスコンロで調理し、皿はすぐとなりのシャワーで洗い、洗い終わった皿は、フタをした便座の上に置く、といった具合である。

マックス・ドルモワ通りのこのホテルは、現在も単身者が多く、そうした事情からか1、2階部分はすべてサブサハラ系女性の売春婦が商売のための部屋として借りている。

シソコ氏

フランスにきたのは90年代のはじめだが、それまでは自分のおじがこの部屋に住んでいた。そこを引き継いで住み続けているが、同じ村の知り合いはいない。結婚して子どもができて、教育上もきわめて環境の悪いところなのではやく引っ越したいが、HLMに入居できない。妻がフランス国籍をもっているのに、他の人よりはHLMに入りやすいと思うのだが。

このホテルの他の部屋は単身の男性が2人一緒に住んでいるなど、70年代に移民してきた親類が借りた部屋をそのまま親類が引き継いで利用している人が多い。

6 住宅へのアクセスにおけるエスニックなネットワークの機能

サブサハラ移民の3類型

キミナル⁽²⁷⁾は、サブサハラ出身の移民と出身コミュニティの関係を次のように分類している。

(1) フランスで賃労働に従事することは一時的なことで考えられおり、自分の位置は出身村にある。この場合、単身寮に居住しており、出身コミュニティとのつながりが強い。サブサハラ出身のうちソニケ移民のほぼ70%近くは、単身の男性であるとされており、フランスに滞在しながら、出身村のコミュニティに完全に組み込まれている。DALにくる移民に家族が多いのは、ひとつには、単身の男性の場合、家族移民のような住宅問題に直面していないため、DALに来る必要がないからだと考えられる。

(27) Quiminal & Timera, "1974-2002, les mutations de l'immigration ouest-africaine" op.cit., p25-27

(2) ごく少数の人ではあるが、稼いだ金をコミュニティの再生産のために使わずに、資本主義社会のなかに自分の位置を見いだすために使うこともできる。この場合、出身コミュニティとは断絶している。しかし出身コミュニティと断絶して、自分だけの資源でフランス社会に「統合」できる移民はほとんどいない。

(3) 3番目が、出身村とのつながりを維持し続けるのも耐え難いし、かといって移民先の競争社会で成功する見込みもないし、それも耐え難い、という選択肢のあいだで解決策をみつけようとしている人だ。ほとんどのサブサハラ系移民が、この状態にあてはまるという。出身村の規範に基づく「拡大家族の規範の支配下にある夫婦」から「契約としての結婚で結ばれた夫婦」への移行がみられるという指摘⁽²⁸⁾は、家族合流することで出身村の規範から自由になる移民が増加していることを予測させる。

切断される紐帯

そもそも、DALの占拠に参加して、住宅を要求するという行為は、財を共同体の外部に求めていることになる。新規にフランスに来る移民は、かならずしもこの制度を受け入れていない。親戚や友人の家への居候をこれらの移民は選択する。ところが、親戚や知人は、居候を受け入れたがらない。これは、十分な床面積が確保できないというフランスの住宅事情によるところが大きいだろう。

7 むすびにかえて

再生される紐帯か新たにつくりだされる連帯か

DALに相談にくる移民たちは、住宅へのアクセスにかんしては、エスニック・コミュニティのネットワークに支えられているのではない。それでは、その後DALの占拠に参加するにさいして、集合行為の基盤にあるのはどのような連帯なのだろうか。

サブサハラ系の移民がフランスで発達させているアソシエーションは、出身村の開発を目的とするものであり、フランスにおける相互扶助

の機能を果たしていない。

10年以上HLMの入居待ちをしている移民は高度成長期の移民の比率を反映しているが、これら300家族のうち、おもな家計支持者の国籍がフランスである家族が46、うちブラックアフリカ系は26、マグレブ系が8となっている。300家族のなかでもっとも多い国籍はマリ⁽²⁹⁾の59、セネガルの57であり、その他ブラックアフリカを加えると152家族がブラックアフリカ出身となる。マグレブ系は、アルジェリア49、モロッコ24、チュニジアが22、合計95家族となっている。このマリ、セネガルの家族は上述のトラオレ氏の例に代表される。それ以外のマリ人の500家族の多くは80年代以降に移民しており、マリ人移民のなかでは必ずしも比率は高くない。セネガルについても同様のことがいえる。

したがって、DALに相談にくるマリ人、セネガル人はフランスのマリ人、セネガル人移民の平均的姿とはいえない。80年代以降は、マリ、セネガルともにフランスの経済協力が大規模に行われるようになり、村の開発を目的としたアソシエーションの位置づけが変わったのちの移民である⁽²⁹⁾。このことが、移民(とくに家族移民)を出身村から相対的に自律させたと考えられる。

サブサハラ出身者にとっては、出身村を基盤とするネットワークは出身村の開発を目的とする単一の機能しか果たしておらず、その他の相互扶助活動の基盤になっているとはいえない。この唯一出身村を基盤にしているアソシエーションも、上述したように出身村の開発の性質の変化によって、形を変えている。こうした事実とあわせて、「連携する女性」やDALの活動を考えると、移民のアソシエーション活動は、出身国のエスニック・コミュニティを「再生」しているのではなく、むしろまったく「新しく」つくっているのではないだろうか。

(28) Nicollet, Albert, *Femmes d'Afrique noire en France: La vie partagée*, 1992, CIEMI-L'Harmattan, p236-242

(29) Le Guay, Céline, 2002, "Entre Saint-Denis et le Mali, une citoyenneté sur deux continents" *Hommes & Migrations*, no.1239, pp33-39